



その時々に見える最善を尽くす

しょうじ すみえ
昌子 住江

特定非営利活動法人 アクションおっばま 理事長

1947年、東京都生まれ。早稲田大学法学部卒業、東京都立大学大学院社会科学部科学研究科修士課程修了。都市計画コンサルタントを経て、1998～2007年度まで関東学院大学工学部社会環境システム学科(旧土木工学科)教授。2008年3月に退任し、地域活動を本格的に開始。2009年神奈川県よりアクションおっばまがNPO法人の認証を受け同理事長に就任、現在に至る。特定非営利活動法人アクションポート横浜代表理事、神奈川大学大学院非常勤講師。工学博士。

インタビュー日：2016年6月8日

聞き手：黒田武史、高橋麻理、菊地良範

都市問題に興味を持ち

法学部から、なぜ土木分野へ？

法学部の学生時代、ボランティア活動で児童養護施設に関わっていました。そこでは、子供たちは中学卒業と同時に社会に出ています。私たち・子供たち、それぞれの暮らしの場である都市の生活環境や就労環境を良くしたいと思いました。そこで都市に関する分野の行政法や都市問題について研究したいと考え、修士課程に進学しました。(20代前半)

修士課程修了後は、学問より実践を志し、当時まだ数も少なかった都市計画コンサルタントに就職しました。その当時は仕事も少なく開店休業状態だったこともあり、1年間、東京都立大学工学部都市計画研究室の研究生になりました。これが、唯一の工学系の学歴になりました。

1970年代半ば、地方自治法の改正により特別区が基本構想・基

本計画を策定できることになったため委託業務が多くなり、都市計画コンサルタントでは忙しい状況が続きました。体もきつかったです。一番困ったのは自分に新たなインプットをするゆとりが無くなったことです。5年程勤めた頃、先の見通しはなかったのですが、とにかく1年間はゆっくり考えようと、思い切って辞めました。(30代前半)

どのような経緯で大学教員に？

お世話になった方々に挨拶状を出したところ、ある方から「橋の調査を手伝わないか？」と声をかけて頂きました。当時、新宿通りの拡幅に伴う四谷見附橋の架け替に際し地元から橋の保存の陳情が出されていました。そこで、土木史的研究と橋梁の保存に関する研究のため土木学会で委員会が立ち上がりまして、そこにアルバイトとして参加させて頂いたのです。翌年は委員になり、委員会は最終報告書を出して、それをもとに「四

谷見附橋物語」という本もできました。橋は高欄・橋灯が四谷に残り、アーチの部分は、多摩ニュータウンに移設保存されています。

委員会活動終了後も土木史に興味を持って、土木学会で活動していました。また、フリーではありましたが研究所の客員や委託などで仕事をしていました。そんな時、関東学院大学土木工学科の教員のお話を頂きました。ですが、私は工学部出身でもなければ、学位も教歴もない。推薦して下さる先生をはじめ多くの方々のご協力で、日本大学で1年間非常勤講師をさせて頂き、東京大学で学位論文の準備をさせて頂きました。こうして関東学院大学の専任講師となりました。(40代前半)

教員を辞め、地域NPOへ

追浜での活動を教えてください

大学に入ってから、まちづくりにおいて理論と実践は車の両輪だと考え、地域に出っていました。そ

委員会からのメッセージ

昌子住江さんは、法学部の出身で都市問題を研究され、都市計画コンサルタントに就職後、大学の土木工学科教授を経てNPO法人理事長へと、異色の経歴をお持ちです。これまで、たくさんの人や運を惹きつけてこられました。時代を超えて活躍される魅力をお聞きました。

の中で、学生を現場に出し、学生が現場で課題を見つけ出し解決策を自分なりに考えるようなゼミにしたい、と思うようになりました。

その当時、大学のすぐ近くの追浜(おっぱま)商店街とつながりができました。商店街の空き店舗活用で大学・地域・行政がいろいろ使えるまちなか研究室にして、活動をはじめました。

学生と地域の方の発案で始めたのがワイン作りです。規制緩和でブドウ畑がなくてもワインが作れるようになりました。ですが、皆さん醸造は素人です。また、醸造免許もありません。醸造法と免許については地域の方が相当苦労されたようです。おかげさまで、2005年に最初のワインができて去年10年を迎えました。ワインの成績もちゃんと優をもらっています。

私はあまり追浜のことは知らなかったのですが、地域の方々に案内して頂くと、海側には戦争当時の軍事施設があったり、山側には鷹取山というハイキングの名所があったり、地域資源が色々ありました。ただ、新しく住んだ方はあまりこのことを知らずもったいないなという思いから、地域の方々とまちづくりに関わりはじめました。

大学ではなく、なぜ地域 NPO に？

2000年からの東京湾口の航路整備事業で、東京湾第三海堡^{*}の遺構が海中から引き揚げられ追浜地域にありましたが、事業終了時に廃棄することに決まったのです。地域の方々から何とか残したいのでお願いします、と強く要望されました。

大学改革や学生指導に追われ

^{*}東京湾第三海堡
東京を防護するため東京湾口に設けられた砲台を設置するための人工島。明治から大正にかけて建設されたが、関東大震災で崩壊、海中に没す。なお、第一第二海堡は、千葉県富津岬沖の一部が残存している。

中、私自身も60歳を目前にして体力・気力も落ちてくる。そのうえ、第三海堡の問題が大きくなってきました。あれもこれもは無理なので大学を早期退職し、2008年から地域活動に専念することにしました。

当時の東京湾口航路事務所や港湾協会、東京湾海堡ファンクラブの方々大変お世話になり、色々助言を頂くことができました。最終的には、地域活性化の一環として活用したいという地域住民からの要望書という形に取り纏め、横須賀市も保存に舵を切ることになりました。現在、地域の方々がガイドとなって一般公開していて、見学する方も増えています。

土木の中で女性としての苦労は？

私は実力以上に活かして下さる方にお会いしたのか、女性としての苦労は余り有りませんでした。ですが、色々苦労された方々の話も聞いておりますし、今後続く世代の方がそういう苦労をなされないようになってほしいと思います。

また逆に、私が大学の土木で教えた意味として、女性の先生や上司に驚かない男性に育ってほしい、というものもありました。

いつまで今の活動を続けますか？

まちづくりは10年かかる、そしてよそ者、若者、ばか者が必要だと言われます。やはり地域の中だけではしがらみが強く、うまくいかないのですね。私はよそ者で、学生が若者で、そういう人が入ったのでうまくいきました。持続させるためにはよそ者も新しい人に代わっていく方がよいと思います。

2009年にNPO法人アクションおっぱまを立ち上げましたので、2019年位が一区切りと考えています。私は応援団、中心はやはり地域の方々です。

これからの目標はありますか？

2019年まで今の活動を続けるとして、あと4年ほど。とても変化の大きい世の中ですので4年後はどんな風景が見えるのだろうか、今から楽しみです。いくつになっても、与えられた場で最善を尽くすことが重要だと考えています。

若手へのメッセージ

若い方へひとことお願いします

私は学生にどうして大学の先生になったのですか、と聞かれたときに、私は運だけで生きてきたから参考にならないよと言ってきました。ただ、今考えるとその時にできる最善を尽くしてきました。それが自分の財産となり蓄積されていきますし、またそれが人の縁に繋がって今があるのだと思います。

これから退職される方へ

アクションおっぱまでは退職された方々と一緒に地域活動をしてきました。その方々がおっしゃるのは、在職中は会社と自宅を往復するだけで地域に目を向けていなかった、こんな面白い地域資源・歴史があるとは思っていなかった、という事です。調べれば調べる程面白い、それほどこの地域にもあるのだろーと思えます。今まで目を向けていなかった所にも、案外面白い世界があるのではないかな、と。

(文責:黒田武史)

インタビューを終えて(聞き手から)

昌子さんは非常にエネルギッシュな方です。将来に対し必要以上に不安を持たず、常にその時々で自分のできる最善を尽くし、ご自身の道を切り拓いてこられたエネルギーをこちらにも分けて頂いた感じです。非常に良い出会いをさせて頂きました。